



# 多治見の瓦生産

—幕末～昭和時代—

平成21年1月19日(月)～7月10日(金)



写真上：左から、ナゼベラ、ユミ、江戸丸瓦仕上げ型、マルガマ、伊勢袖型  
下：左から、巴型、棧瓦切り型、キリガマ、江戸丸瓦切り型、ミガキゴテ

## 1. はじめに

日本国内の瓦葺屋根は、江戸時代後期の棧瓦の発明を契機として、江戸や大坂の商家から民家へと広まっていく。明治時代になると全国の民家に普及し始め、地元の需要を満たすために、農家の兼業として全国各地で瓦が生産されるようになる。

多治見の瓦生産は、古文書によれば既に江戸時代後期には長瀬村で始まっていたと考えられるが、明治時代に入り、旧可児郡を中心に生産が広まっていく。岐阜県記録課が作成した明治14年(1881)「可児郡各村略誌」によると、瓦窯の数は根本村3ヶ所、大原村4ヶ所のほか、大針村、野中村、田中村(中之郷と池田が合併)、甘原村、長瀬村に各1ヶ所と記録されている。農村地帯であった可児郡は小規模経営の農家が多く、その現金収入の手段として、養蚕や栗栽培、陶器荷作り用の藁の供給などの副業が行われていたが、瓦生産もこのような農家の副業から発展したものと考えられ、生産した瓦は多治見方面へ供給していた。可児郡の中でも特に生産が盛んだった大原(現在の小泉町・大原町・幸町)では、最盛期の明治30年代には16戸まで増加するが、戦後になると、三州の安価な釉薬瓦におされ、昭和40年頃までに多治見の瓦生産は終焉する。



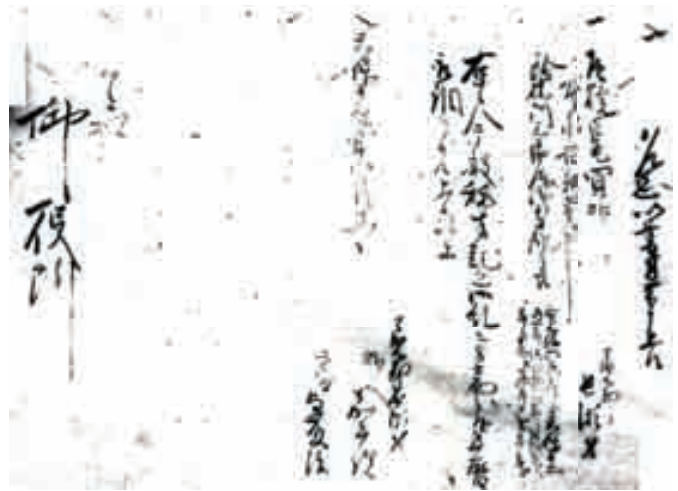
--- 郡境  
— 合併後の町村境  
- - - 合併前の村境  
— その後の合併により分町・合併した区域  
■ 多治見市域内

注 笠原村(笠原町)は、平成18年(2006)年1月に多治見市と合併  
明治22年(1889)村制施行当時の合併図  
(『多治見市史 通史編下』1987に加筆)

## 2. 多治見の瓦生産の始まり



◀ 鬼瓦 (妻木公民館所蔵)  
銘「可児郡長瀬邑瓦屋  
作人嘉平治」



▲「長瀬村瓦焼冥加年歴申上書」嘉平治の名前が見られる。  
写真提供 多治見市図書館郷土資料室

多治見の瓦生産の、文書による初見は天保13年(1842)である。これによると、長瀬村の瓦屋「嘉平治」が寛政6～天保12年(1794～1841)まで瓦焼冥加(税金の一種)を納めたと記されている。土岐市妻木町の民家の屋根にあげられていた鬼瓦に、この「嘉平治」銘の入ったものが見つかった(現在は妻木公民館が所蔵)。

また、根本村では嘉永元年(1848)に若尾源兵衛が、大原村では慶応初年(1865)頃に坂崎黒兵衛と黒作左衛門が、それぞれ瓦生産を始めたとされるが、「可児郡土岐郡各村略誌」によると、明治14年(1881)には瓦窯の数は大原村で4ヶ所、根本村で3ヶ所になっている。明治時代に入り、陶器生産が盛んな土岐郡に対し、農村地帯である可児郡で瓦生産が盛んになっていくことがわかる。

## 3. 明治40年代、池田村の瓦生産



可児郡池田村(現多治見市池田町)には、明治33年～昭和6年(1900～1931)にわたる役場日誌が残されている(現在は多治見市図書館郷土資料室が所蔵)。これは、この間に村長を務めた小池勇が書き残した記録である。小池勇は、安政5年(1858)池田村の医家に生まれ、東京及び岐阜師範学校で学んだ後に教職に就くが、自由民権運動に関わり投獄される。釈放後は、明治31年(1898)の土岐郡鶴里村(現土岐市鶴里町)村長に続き、池田村村長に就任し、昭和6年までその職にあった。明治40年(1907)、池田村では、小池らが中心となり池田製瓦会社が設立され

瓦生産が始められる。これは村の現金収入を得ることが目的と考えられるが、経営はうまくいかず、数年で頓挫する。明治40～42年の日誌からは、瓦株の販売、瓦土の採掘や職人の雇用、瓦窯の焼成のことなど、村をあげての瓦生産の記録を読み取ることができる。

### 多治見の瓦生産と三州瓦

愛知県三河地方で生産される瓦は三州瓦といわれ、兵庫県の淡路瓦、島根県の石州瓦と並ぶ瓦の三大産地の一つである。江戸時代後半頃から始まったとされる三州瓦は、三河地方各地で盛んに生産されると同時に、瓦師(瓦職人)が遠方へ出稼ぎをし、その地で瓦生産を行ったという特徴がある。三河の瓦師は、近江、美濃、信濃などへの出稼ぎが確認されており、中にはその土地に住み着いた者も多くいたという(高浜町誌編集委員会『三州瓦のあゆみ』1968)。多治見においても、三河との関係は深く、瓦師はもとより、窯や道具なども三河から導入されていたことがわかっている。

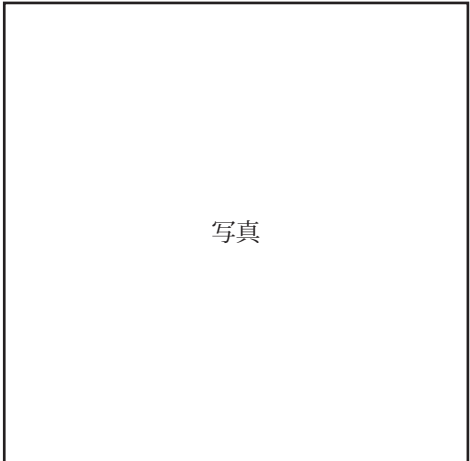
大原に残る牛岩の民話に、「渡りの金太」という三河から流れてきた瓦職人が登場する(伊藤喜作『翁のたわごと』1990)ことから、三河の瓦師が古くから多治見へ入ってきていたことが推測される。明治40年の「池田村役場日誌」には、大原の石川康次郎が瓦型購入と職人雇入れのために三河へ派遣された記録があり、型の購入先として記された「形新」は碧南市の瓦型師である。石川康次郎もその姓から、三河出身者の可能性も考えられる。

また、聞き取り調査によって、昭和時代の大原には三河から出稼ぎの瓦師がやってきていたこと、三河で修行した鬼師がいたことなどが分かってきた。瓦型師も毎年来訪し、道具の修理などを行っていったという。このように、多治見の瓦生産は常に三河の三州瓦と密接な関係を持ちながら、発展してきたといえる。

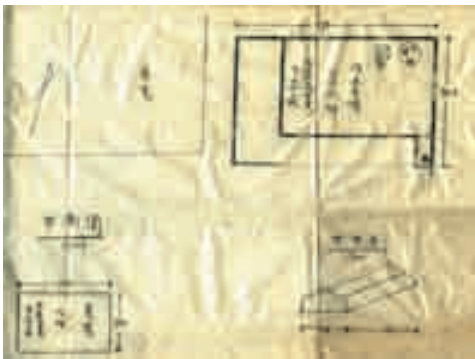
#### 4. 昭和前半期の大原の瓦生産

幕末に瓦生産が始まった大原では、明治30年代に瓦生産者16戸と最盛期を迎える。戦中戦後は3戸となり、昭和40年(1965)頃までに全て廃業する。最後の3戸のうちの1戸が水野豊吉(屋号ヤマト)であるが、本展で展示している瓦製造道具は大正時代～昭和時代前半に水野豊吉が使用した一括資料である。同時に残されていた瓦関係文書によると、昭和18年(1943)に土練機と荒地出し機という機械を設置していること、多治見町、豊岡町、滝呂(以上、現多治見市)、泉町、土岐津町(以上、現土岐市)の材木店など、近隣への瓦の出荷状況などが分かる。他に、小泉村役場や神明公園内に大正15年(1926)4月に新築落成した料亭「望仙楼」への出荷記録もみられる。

また、鬼瓦は鬼師とよばれる専門の職人が製作するが、昭和時代前半の大原には「鬼幸」「鬼勝」と呼ばれる2名の鬼師が、注文に応じて各瓦屋をまわり、製作を行っていた。



写真上：瓦素地の天日干し  
下：達磨窯での瓦焼成



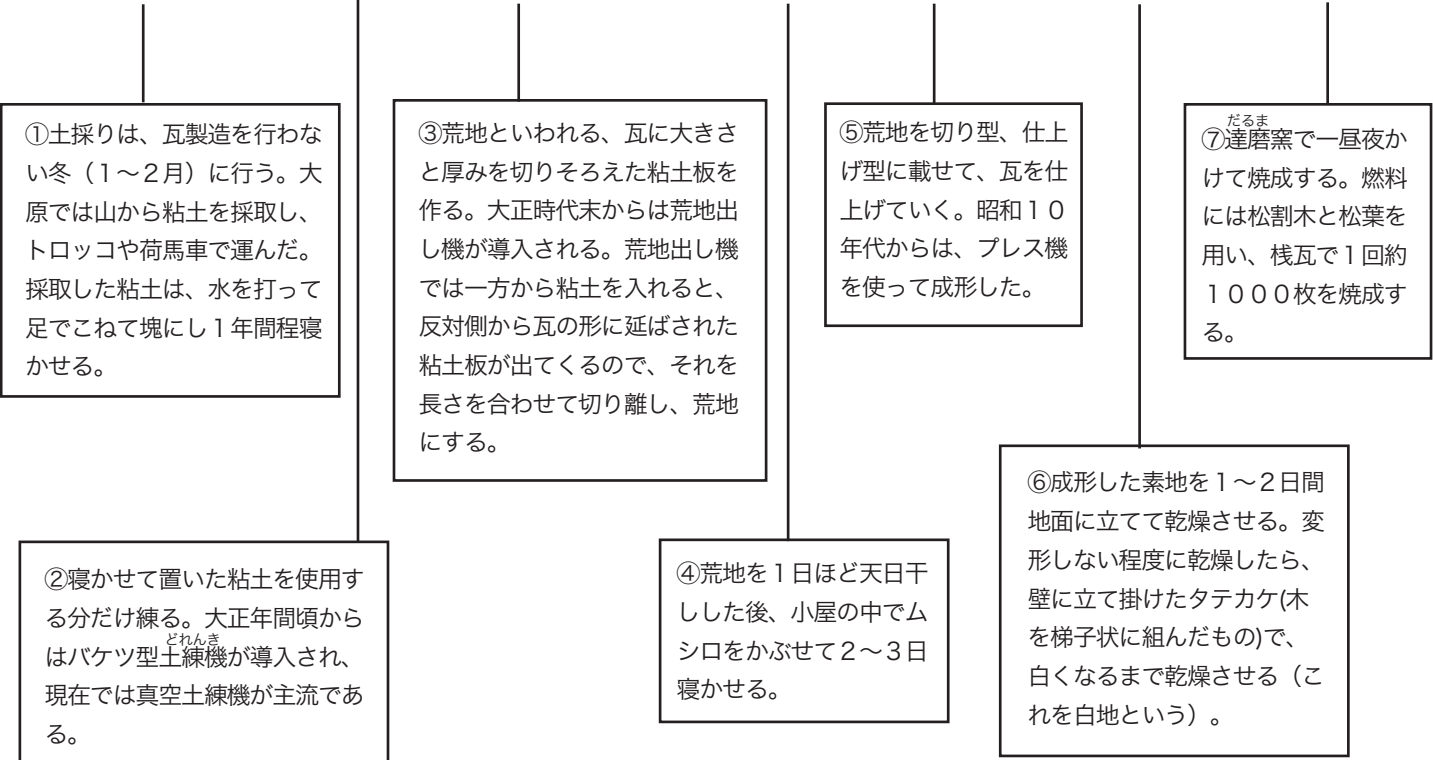
◀水野豊吉瓦製造工場見取図

個人所蔵

昭和18年に多治見警察署に提出した「工業場原動機設置許可申請書」に添付された図面である。この時、土練機と荒地出し機を設置するための申請が行われている。

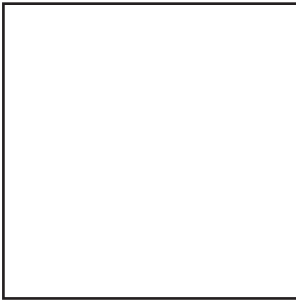
#### 瓦の製造工程 (昭和前半期の大原での製造工程)

①土採り → ②土練り → ③荒地作り → ④乾燥 → ⑤白地作り → ⑥乾燥 → ⑦焼成





## 手作業による瓦の製造工程



可児郡御嵩町で瓦製作を行う現役の瓦師に写真撮影のご協力いただきました。



①タタキで全体を叩き締める。



②キリガマで四方を切り落とす。



③ナゼベラで表面を撫で整える。



④アナアケで針金を通す孔を開ける。

現在は、ほとんどの瓦はプレス機で製作される。特殊な瓦や規格外の瓦のみ、このように手作業で作られる。

①～④の工程までで、棧瓦が完成する。端瓦、袖瓦など付けものが付く場合は、さらに⑤～⑩の工程が加わる。写真は、谷板瓦（谷筋違）の製作例。



⑤垂れとの接着面をカキヤブリで傷付ける。



⑥カキヤブリで傷付けた部分をミズバケ（水を浸けた刷毛）で湿らす。



⑦瓦素地と垂れの傷つけた部分を合わせるようにして接着する。



⑧ミズベラ（水を浸けたヘラ）で、接着部分を撫で整える。



⑨垂れの木型に合わせて、余分な粘土をマルガマ（丸鎌）で切り落とす。



⑩カネベラで表面を磨き整える。

### 謝辞

本展開催にあたり、瓦製造道具をご寄贈いただきました方、聞き取り調査にご協力いただきました方ほか、下記の機関等にご協力いただきました。厚く御礼申しあげます。

正助苑、妻木公民館、豊田市教育委員会、  
伏見窯業株式会社、小泉公民館、  
多治見市図書館郷土資料室 (敬称略)

多治見市文化財保護センター企画展

### 「多治見の瓦生産 幕末～昭和時代」

展示期間：平成 21 年 1 月 19 日（月）～7 月 10 日（金）  
開館時間：午前 9 時～午後 5 時 休館日：土・日・祝日 入場無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26

TEL(0572) 25-8633 FAX(0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>